

目次

植物食の偉人たち

始めに

迷信中の迷信

本書で紹介する八人の植物食者

13

16

第一章 レオナルド・ダ・ヴィンチ

万能の天才を特徴付けていた慈悲の心

せいたいちょうよう
聖胎長養

「言葉の上品な者は、王がその友となる」

21

24

26

第二章 レフ・トルストイ

19世紀の精神的巨人

ロランとガンジー

トルストイの前半生

31

31

32

トルストイの新生	34
肉食批判	35
教会批判	37
徳富蘇峰と徳富蘆花	38
ドウホポール教徒の移住援助	41
『復活』	42
家出先での死と遺言	43
トルストイの志を継ぐ遺族たち	46
第三章 アンナとエドワード	
イギリス・ビクトリア朝の彗星	51
妖精や天使と交流した少女期	51
狐狩りに耽った青春期	52
結婚、スピリチュアリズムとの関わり	54
植物食の開始、その重要性への確信	55

カトリック入信と文筆活動	56
エドワード・メイトランドとの出会い	57
医学博士号の取得	60
精力的活動後の早逝	61
女性の成し得る最善の平和活動	62
キリスト発見に不可欠の動物愛護精神	63
ウェブ上で読めるアンナの著作物	64
アンナ亡き後のエドワードの活動	64
エドワードとガンジールの交流	65

第四章 シュヴァイツァー博士とヘレーネ夫人

「生命への畏敬」という金字塔建設者	71
出生からランバレネ赴任まで	72
ランバレネ到着からランバレネ再訪まで	77
少年時代のエピソード	84

『文化哲学』	89
生命への畏敬	93
「生命への畏敬」に関するシュヴァイツァー自身の言葉	96
動物たちに対する配慮	102
シュヴァイツァーの食事	106
音楽家としてのシュヴァイツァー	108
音楽の靈性	117
ヘレーネ夫人について	119
シュトラースブルク	135
令嬢レーナと令孫クリステイアーネ	137
「シュヴァイツァー博士とヘレーネ夫人」の終わりに	140
第五章 宮沢賢治	
宮沢賢治の理想とした食と職	145

第一部 賢治の生涯

出生から小学校時代まで（～12歳）	148
盛岡中学校時代（13～17歳）	151
「家業の体験」と「法華経との出会い」の年（18歳）	154
盛岡高等農林学校時代（19～21歳）	157
盛岡高等農林学校研究生時代（22歳～23歳）	163
モラトリアム時代（24歳～25歳）	167
稗貫農学校教師時代（25歳～29歳）	172
「羅須地人協会」時代とその後（30歳～34歳）	182
東北砕石工場技師時代とその後（34歳～36歳）	189
終焉（37歳）	191
第一部の終わりに	194

第二部 賢治の悟り

法華経への帰依と不殺生戒の遵守	197
-----------------	-----

賢治の自己省察 ^{せいしやう}	216
『銀河鉄道の夜』に暗示された食(職)と境遇の相関関係.....	222
究極の博愛思想.....	237
コスモス(宇宙愛)の体現者.....	242
今も続く賢治の願い.....	248
第六章 井戸の中で新生した人	
ラジオ番組で聴いたこと.....	257
井戸の中での回心.....	257
人生の目的と見えざる存在の教導.....	264
無知蒙昧 ^{もうまい} な人の死後と来世の境涯.....	269
第七章 最優先すべき食事改善	
偉人たちの共通語「アヒムサー」.....	277

植物食は神典類やイエスの教えの最重要事項	280
1848年・共産主義とスピリチュアリズム出現の年	284
スピリチュアリズムとして再説されたイエスの教え	288
期を同じくして始まった植物食推進運動	289
シルバーバーチとホワイトイーグルの教える不殺生戒	293
「万物の霊長」とは如何なることか	295
病気の元凶である動物食	297
環境問題の元凶である動物食	299
低劣な雰囲気を作り出している動物食	302
動物の食として定められた植物食	305
愛の言霊 <small>ことば</small> による合掌礼拝	308
言霊とは何か	310
動物性食品を食べてはならない理由	312
不殺生戒遵守の功德	315
植物食で実現する地上天国	318
人生の土台である食	319

目次

植物食の偉人たちの言葉 321

終わりに

絵画上の真理探求とその結果 331

本書出版のいきさつ 333

〈掲載資料〉「第五章 宮沢賢治」では、宮沢賢治記念館にてご許可いただき
撮影（2001）した写真を掲載